

垂井城主平塚因幡守為広公



注 平塚為広公の肖像画（タルイピアセンター所蔵）

一 初めに

関ヶ原合戦で最も讃えられ、歴女から人気のある武将は、西軍の大谷吉継であろう。四百二十年余り経った今も山中の吉継の墓にお参りする観光客が絶えない。

大谷吉継は徳川家康との戦いに負けることも死ぬことも覚悟し、小早川秀秋の裏切りも予期しながら目の不自由な体で最後まで戦い、ついに自害し、湯浅五助に

介錯をされた。この最期の経緯は誰でも良く知っている史実である。

ここでは、大谷吉継との友情に生き、信義に篤く、関ヶ原合戦中に最期を遂げた垂井城主平塚為広公の生涯を寄稿する。

二 生い立ち

先祖は桓武平氏の流れを汲む三浦氏で六代目為行のとき、箱根山の山賊を退治した功績により「武蔵国平塚郷」を賜り、それ以来平塚の姓を名乗った。為広は為行から六代目である。（平塚家譜）一説には平塚家は信州佐久郡の出で、足利義詮（室町幕府二代將軍・よしあきら）に属し、為広の三代前平塚扶為（すけため）のとき、故あつて濃州不破郡に住み、二代前の弟重久は遁世して垂井の普門山専精寺の弟子となっている。為広を俊衡ともいい、後に、因幡守為広となる。

三 略年譜

① 天正五年（一五七七年）播州福原城攻めで黒田官兵衛の助けを借り、城主福原助就（すけなり）と助けに入った城主の弟までも討ち取る手柄を立てる。羽柴秀吉の勘気を蒙（こうむ）り関東で浪人をしていたが、この活躍で秀吉の黄母衣衆として再度仕える。史料 この戦いにおける為広の活躍を裏付ける史料が残されている。天正五年十二月五日付で、当時秀吉の領

地であつた有力者下村玄蕃助に宛てた、播州の戦況を伝える秀吉の書簡である。

播州佐用郡内に敵城三ツ候、

其内福原城より出人数、相防候、

然者竹中半兵衛・小寺官兵衛兩人先に遣候処、

於城下及一戦、数多討取候、

我等者に平塚三郎兵衛と申者、

城主討取候処、其弟助合候を同取候処、

注 この史料は長浜市下郷共済会所蔵から

注 佐用郡内の敵城の三つとは、

上月城主・赤松右京大夫政元・武勇に優れる

.. 赤松蔵人大輔政範・赤松政元の次男で嫡男

福原城主・福原左京進則高・福原藤馬允則尚・

福原則高の男・室は赤松政元の娘

高倉山城主・福原主膳助就・室は福原則高の娘

の三城と思われる。

補充1

天正五年（一五七七年）十一月、秀吉は小寺孝高の策を入れ、一方だけ開けて佐用城を包囲した（兵法に言う囲師必闕の策であるという。時に、秀吉の勘気を被って浪人していた平塚藤蔵という者（のちの平塚為広である

という）が孝高の元を訪れ、帰参のため武功を立てるため陣借りをした。孝高は、城方は不利を悟り、夜中に空いた一方から退くはずであるから待ち受けて高名を挙げられよと助言した。この話をひそかに聞いた孝高の家臣・竹森新次郎も待ち伏せを行い、主膳の弟・伊王野土佐と、主膳の家老・祖父江左衛門を打ち取った。ときに平塚は複数の敵と相手に戦っていたのが、竹森が助勢し、平塚が鎗をつけて討ち留めた敵の首を平塚が取ると、これが福原主膳であつたという。このくだりは、平塚と竹森が手柄を譲り合い、孝高が平塚の功績と裁定して秀吉に推挙、平塚は帰参がかなつたという話になつている。

なお、城方は城主らが討たれると引き返してり力戦したが、城は落城し、黒田勢によって五百名ばかりが討ち取られた。

注 囲師必闕とは、古来から伝わっている兵法のひとつである「孫子」に書かれている。相手を攻撃する際は必ず逃げ道を作っておくこと。
すなわち、「釣り野伏せ」（二面包囲作戦）ともいう。

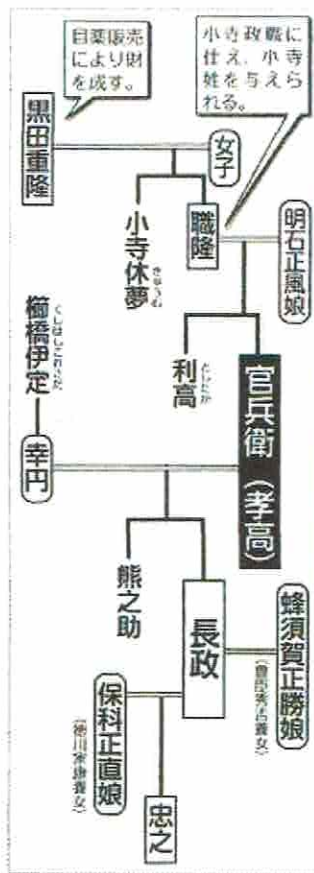
②天正七年（一五七九年）摂津有岡城に抑留されている黒田官兵衛の様子を偵察に行く。

史料 天正七年十月二十八日付で。秀吉が黒田官兵衛の

叔父、休夢に宛てた書簡がある。この書簡は官兵衛が織田信長に謀叛した摂津伊丹城主荒木村重を説得に行き、そのまま監禁された頃のもので、伊丹城と同時に攻め立てている三木・御着・志方等の城の処置について休夢に指示している。この中に

「いそき平つかを進之候。そこもこのようすにより、三木の木、いのちをたさうけ可申候。又みなみなめし出し候は、ほしころしに三木をはいたし可申候、いのちをと、わひ候事かきりなく候。三木ゆるし候は、こちやく・しかたの事、のけさるようになし、ほしころしか、又はせめころし可申候間、のけさるようになし、いさか候て可給候。いさい平三ひやうへ可申候。かしく」

と伝えている。文中に出てくる下線の人物は平塚為広のことで、秀吉のそば近くで軍使として活躍している姿を見ることが出来る。



この史料は黒田家譜卷之二から

注 「かしこ」 女性が手紙の終わりに添えるあいさつの語。形容詞「かしこい」の語幹(ごかん)(ごかん)から

「かしく」男性の用いる「恐惶 (きょうこう) 謹言」などにあたる語。

③ 天正十二年(一五八四年)小牧・長久手の戦いに秀吉隊に従軍し、軍功を挙げる。

史料 本能寺の変後の秀吉の天下統一事業のなかで行われた小牧・長久手の戦いに、秀吉の命令を伝える重要な役目を為広が担っている。この中に

「熊申候、岐阜留守之儀、御次(秀勝)可被申付之由申越候条、政通以下入念、町人不迷惑様ニ可付事専用候、并大良(浦)城加勢事、面々版替ニ仕候て、人数三百宛可入置候、然者彼城普請之儀をも入精仕置尤候、委細平塚(二郎兵衛尉)口上ニ相含遺候、不可有油断候、恐々謹言」

天正十二年卯月十一日 筑前守 秀吉(花押)

注 この史料長久手町史 史料編六から

注 秀勝は信長の四男

④天正十八年（一五九〇年）秀吉と北条氏の小田原の戦いに秀吉隊に従軍し、軍功を挙げる。

⑤文禄元年（一五九二）朝鮮の役に肥前名護屋城を守る。このとき、同じ名護屋城にいたことから大谷と懇意になったといわれる。

⑥文禄四年（一五九五年）七月 五千石の家来となる。

⑦慶長三年（一五九八年）三月、秀吉は京都にある醍醐寺の辺りを花見の宴を催す。その中で庭園の警護や三の丸殿（秀吉の側室・織田信長の娘）を警護する。八月秀吉の遺物として金五枚を受領する。

注 金（きん）（きん）五枚は今でいうと五十万円くらい

⑧慶長五年（一六〇〇年）二月に豊臣秀頼から一万二千石の垂井城主を賜る。関ヶ原合戦に西軍として兵約三五〇余人を連れて参加し、大谷隊の兵も併せて指揮するも、奮戦の末討ち死にする。

四 合戦前の動き

大谷吉継は家康の会津上杉征伐に参加するためには敦賀城を出発し、七月二日垂井城の為広の所へ来ている。そのとき、石田三成の使者榎原彦右衛門が三成の書状を持参し、佐和山城へ招いている。そこで三成から家康挟撃計画を聞き、大谷・平塚は驚いたに違いない。いく

ら親友の頼みといえ、二人とも首を縦に振らず、どう考えても三成が家康に勝てるとは思えない。両者の石高や兵力などの差が大きく、さらに三成には大将として最も必要な人望が薄い。家康に勝つことは無理だとやめるよう再三説得したが聞き入れられず、一度垂井へ戻る。

しかし、吉継は石田との長年培った友情と秀吉の恩顧を考えると、無下に断ることもできず、二人はよく相談し、討ち死にを覚悟して再び佐和山城へ行き、三成の計画に同意する。

早速、諸将による相談の結果、総大将には毛利輝元を擁立する。七月十七日には、前田玄以・増田長盛・長束正家の豊臣三奉行が「内府ちかひの条々」を諸大名に送る。これは秀吉亡き後、家康が犯した罪状十三カ条を書き連ね、秀吉の遺児・秀頼擁護を名目として味方の兵を募る書状である。

常到大谷と行動を共にする平塚為広は、小早川秀秋と同じ西軍として七月十九日からの伏見城攻撃に参加し、八月一日落城させる。その後、西軍は三方面から東進し、為広は吉継と共に北陸に進み、秀秋は毛利軍と伊勢に向かう。

しかし、秀秋は途中、近江高宮で留まり動かず。このとき、吉継は秀秋の本心を疑い、佐和山城に拘束しよう

と呼び出すが秀秋は応じない。そこで、為広は戸田重政と高宮に行き、秀秋に会い、場合によっては討とうとする。しかし、秀秋は病と称して為広の前に現れず。

注 この暗殺計画は参考文献③から記述。

その後、大谷は九月三日に脇坂ら四将の隊も率いて関ヶ原に入る。そして、山中村で東山道を挟んで北に大谷隊、南に脇坂ら四将の隊が藤古川に沿って着陣する。その後、決戦まで十二日間、大谷軍は、山中村の石原峠付近に陣小屋を置いて宿営し、西軍の陣づくりを行っていたと推定される。吉継は、前夜三成以下、西軍の面々を迎えて、東山道・北陸道を押さえる陣形をほぼ予定通り形成する。



五 合戦当日の動き

朝になって、大谷隊は山を下り、東山道に近い藤古川右岸の急峻な崖の上に移動し、吉継自ら山中宮上に精兵六百余人と共に着陣する。また、為広と重政は藤川台から藤古川へ向かい、吉継の息子達である大谷吉勝や木下頼継と共に藤古川を挟んで藤堂高虎・京極高知隊と大激戦になる。

午後、小早川軍が寝返る。正面で受け止める吉継の元に、為広は重政と直ちに支援に戻り、小早川隊を側面から攻撃する。さらに、前からの藤堂・京極・山内隊を松尾山の麓まで、二度、三度押し返す。しかし、為広は朽木・脇坂などの反応軍にも襲撃される。衆寡敵せず、疲れ果ててしばし、馬上で休んでいるところを見つけた小早川の家臣横田半助は槍で為広を突き、再び突かんとしたとき、為広は馬より飛び降り、馬を楯にして槍で半助と戦い、ついに半助を突き伏せ、寄ってきた若者に首を取らせる。討ち取った横田半助の首に辞世の句「名きの為に 捨つる命は 惜しからじ 遂にとまらぬ 憂き世と思へば」【名譽のために殉ぜられるなら、自分の命など惜しまない。限られた人生だから】を添えて大谷に送る。これに対して大谷は「契りあらば 六つの巷で待てしばし おくれ先立つ 事はありとも」【義とは死ぬ覚悟、為広殿と義を生き証に、六道の分かれ道で暫

く待っていて欲しい。後先はあつてもそこから共には冥土に向かおうぞ」と返歌を書き、使者に預ける。しかし、この和歌が為広に届いたかは分からない。

その頃、為広は無数の刀傷などで弱り果て、大長刀を一振り振れば近くの者が吹っ飛ばした剛の為広も今はこれまでと、自害せんと丘に上がる。そこを山内一豊の家臣榎井太兵衛に見つかる。これまでの激戦の中で疲労困憊していた為広は榎井と必死に戦うが、やがて為広の大長刀の柄が折れ、ついに為広は榎井に討たれる。吉継もまた自刃し、平塚・大谷両隊は壊滅。やがて西軍の敗北は決定的となる。

参考までに、このときの兵力数は大谷吉継・平塚為広・戸田重政・大谷吉勝・木下頼継隊合わせて約三千人、対して、京極高知・藤堂高虎・山内一豊隊は約六、七千人である。それにしても乱戦の最中に、命の危険が迫っているときに、歌を詠み合う心の余裕はどこから生まれるだろうか。きつと出会ったときからの互いに信頼と尊敬と友情の要因以外ないと思える。

六 平塚家の系図

平塚家の系図等によると、家康は為広を敵ながら天晴な武士の中の武士だと格別に配慮して子孫を残している。現在、子孫は三系統があることが分かっている。

① 大垣市檜の平塚家

垂井城跡と思われるところに建つ専精寺（浄土真宗本願寺派）に為広の系図及び法名「至成院殿止観定榮大居士」の位牌がある。その系図の中に、当時、母は病死し、為広戦死するや乳母は三歳の松千代を抱えて檜村へ逃げ、妾は幼子一人をつれて青野へ帰ったとある。今も檜には平塚三家が高台に住み、その周辺のその家臣と思われる堤家があり、そのいずれの家も師匠寺が為広ゆかりの専精寺である。

平塚氏系図

俊衝 平塚七郎衛門 豊臣秀吉公に仕えて後に任因幡守 又改 為廣 不破郡垂井に住す

母者福東城主丸毛三郎兵衛女 室者津田長門守女 慶長五年庚子九月十五日関ヶ原北ノ野にて戦死す

② 和歌山市の平塚家

平塚らいてうの祖先は幕末まで紀伊徳川家に仕え、寛政重修諸家譜や古今武家盛衰記に記載されている。現在尼崎市に在住の平塚隆一氏が系図及び陣羽織・刀装具を所蔵されている。

弟越中守為景は捕らえられ、家康の前につれて来られたが、さすが家康は兄為広といい、弟為景といい武士の鑑と思ひ、一旦召し抱えたが紀伊徳川家に預け、子孫を残させる。

為広の弟為景は紀伊徳川頼宣（家康の十男）へ仕える

ことになり、久賀（ひさよし）と改姓し、為広の長男五郎兵衛・二男熊之助・三男勘兵衛重近をつれてくる。その後平塚の存続を思い、長男五郎兵衛に三百石・二男熊之助に二百石の知行を譲って仏門に入る。

二男の系統は、將軍吉宗に従い、三百石の旗本として存続する。

その後、平塚家八代為忠の二男平塚定二郎の子に常次郎（実業家・政治家で昭和四十六年時運輸大臣を務める）、妹に平塚らいてう（社会運動家で女性解放運動に取り組む）がいる。

三男重近は叔父為景の養子となり、紀伊家七百石の知行取りになり存続したと伝える。

③ 津市の平塚家

平塚為広に娘がいる。父為広が戦死するや、娘はいち早く京都の市中に忍び込み、子供と共に住んでいた。京都も探索が厳しく、ついに京都所司代板倉勝重の役人に見つけられ、捕らえに來た。娘は堂々と対応し、待たせる間に五歳と三歳の男子を乳母に預けて裏口から逃がし、自分はいちどり（着物の裾が地に引かないように、襦（つま）や裾を引き上げること）の下に父為広の四尺五寸の筋がね打たる八角棒を隠し持ち、駕籠に近づくとそこにいた同心らを八角棒で次々に打倒し、与力の馬に飛び乗り、どこかへ逃げた。

その後「両人の男子と母も藤堂家にて生涯を終わりにける。今藤堂家に平塚権太夫というがその子孫なり」注 江戸時代中期に成立した「明良洪範卷十七」から

七 終わりに

平塚為広は西軍の大谷吉継に隠れた存在であったが、敗戦濃厚になって逃げる武兵の多い中、最後まで戦い、義に殉じ立派に討ち死にしている。この合戦に亡くなった大名はただ一人、敦賀五万石の城主大谷吉継と言われているが、ここに、垂井城主一万二千石の平塚為広公を加えて後世に伝えていきたい。残念ながら、合戦後、垂井城は廃城となり、専精寺近くに城跡と思われる石垣を見ることができぬ。

八 平塚為広の肖像画

為広の死から四百二十年後にあたる令和二年、滋賀県長浜市の平塚町が管理していた肖像画の掛け軸が、垂井町に寄贈される。肖像画の主は平塚為広。現存する唯一の彼の肖像画である。平塚町では祭りの時に天神様として祀られていたが、「慶長五年 平塚因幡守（ひらつかいなばのかみ）」という裏書があったことから、描かれているのが為広であることがわかる。

補足

「内府ちかひのじょうじょう」

と題された十三箇条からなる家康弾劾の書であった。要約すると、

一、石田三成、浅野長政の二人の奉行を大坂から追放した。

一、討伐を独断で実行しつつある。

一、前田利長から人質(利家の正室をとった)。

一、知行を独断であてがっている。

一、伏見城の留守居(前田玄以)を追い出して軍勢を入れた。

一、勝手に諸侯と誓紙を交わしている。

一、大坂城西ノ丸の北政所を京に追った。

一、西ノ丸に本丸のような天守を築いた。

一、諸侯の妻子をひいきによって国許に帰した。

一、勝手に諸侯と縁組みしている。

一、若衆を扇動、徒党を組ませた。

一、他の大老衆を無視して独断で決裁している。

一、独断で検地の免除(石清水八幡宮)をしている。

というものである。家康の五大老、五奉行制の有名無実化と太閤秀吉との誓約違反を具体的事例をあげながら糾弾していた。この書状を一読すれば秀吉亡き後の

家康の傍若無人ぶりがよくわかる。

この十三箇条の書状とともに家康討伐の檄文も添えられていた。両書状ともに大老の毛利輝元、宇喜多秀家、奉行の前田玄以、増田長盛、長束正家の五人の署名が連ねられている。この中に三成の名がないが、それは奉行筆頭である三成までもが家康の非道によって大坂を追放させられているという現実を強調するためである。書状の作成者は言うまでもなく三成である。

九 参考文献

- ①垂井の文化財 二〇〇〇第二四集「家康が讚えた西軍の垂井城主平塚為広公」
- ②垂井の文化財 二〇〇五第二九集「平塚為広の登場」
- ③陣跡が伝える関ヶ原の戦い 編集者 草野道雄
- ④平塚為広公の肖像画(タルイピアセンターからの使用許可)
- 史料①長浜市下郷共済会所像
- 史料②黒田家譜卷之二
- 史料③長久手町史 史料編六